

自由論題4、報告3

報告テーマ

香港人のアイデンティティについての「日本」——「本土派」と戦争の記憶——  
‘Japan’ in the Formation of Hongkongers’ Identity: ‘Localism’ and War Memories

氏名(所属)

銭 俊華(東京大学)  
CHIN CHUN WAH (The University of Tokyo)

要旨(800字程度)

本報告は、2010年代に台頭してきた香港ローカリズムの勢力「本土派」による記憶の操作を考察し、第二次世界大戦をめぐる記憶と香港アイデンティティとの関係を明らかにする。

2019年6月以降、香港において社会運動が展開されている。デモ隊は「光復香港(香港を取り戻せ)」を叫び、香港の象徴である獅子山には「保衛香港、Fight for HK」という垂れ幕が掛かった。これらの表現は、第二次世界大戦において日本の侵攻に抵抗した「香港保衛戦」および日本軍政が終結した「香港光復」という歴史にまで遡ることができる。同年8月30日の「重光記念」集会では、香港アイデンティティと戦争記憶に基づく「犠牲」「保衛」「重光・光復」などの精神や想像が連結された。

「本土派」は香港アイデンティティを主張し、戦争記憶を社会運動への動員の資源として利用し、政府による公定中国民族意識に対抗する。「本土派」は自らが香港保衛戦を記念する行事を行うと同時に、退役軍人団体とカナダ総領事館が行う戦没者追悼式への出席を呼びかける。「本土派」は、現在の「中国化」を1941年の香港陥落に喩える。今日の香港人は香港保衛戦で戦った軍人と戦没者であり、香港の主体性と香港アイデンティティの保存は1945年の「重光・光復」に喩えられる。

このようなレトリックは「本土派」から始まったわけではなく、1950年代、香港の国民党寄りのメディアですでに用いられていた。それらのメディアのレトリックは、中共の執政を日本による中国大陸の陥落に喩えた。日本の悪質さを取り上げて中共と比較し、後者はより恐ろしいという結論が出された。中共の怖さを強調するために、日本の悪質さはよく議論された。

これに対して、「本土派」が強調しようとするのは、香港には独自の歴史があること、土地と自由を守る犠牲的精神、国際的自由都市への各国の支援と連帯の伝統があること、である。1950年代のレトリックと比較すると、「日本」の存在はそれほど目立たない。